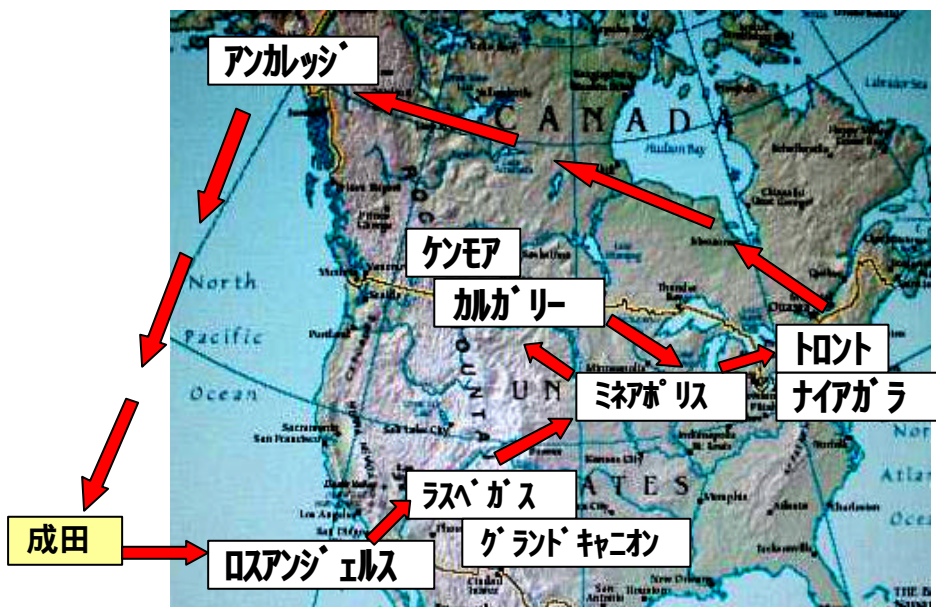


アメリカ3大絶景の旅

《グランドキャニオン？ カナディアンロッキー？ ナイアガラ》
(2004年5月26日～6月2日)

退職を記念して2001年2月、念願のニュージーランドを旅行した。次に行きたい所はカナディアンロッキーだ。還暦を記念して行ってみようと思い、インターネットで格安ツアーを探した。あった、あった。近畿日本ツーリストのHPに「憧れのアメリカ北大陸3大絶景、グランドキャニオン、カナディアンロッキー、ナイアガラの滝」とあった。季節と価格を考えて、5月26日出発のツアー(7泊8日)に参加した。



第1日目： 成田？ ラスベガス？ グランドキャニオン（泊）

成田空港の集合場所には添乗員のYさんが待っていた。同行者は40名、殆どが熟年ペアである。40名を引率する添乗員は大変だろう。面倒をかけないように、出来れば彼女をヘルプしてやろう。Yさんのトランクを見ると、航空会社のラベルがびっしりと張り付いている。経験豊富なベテラン添乗員かなと一寸安心する。

搭乗券を受け取り、ノースウエスト(NW)機に乗り込む。今回の搭乗機は全てNWである。退屈なフライトを我慢し、ロサンゼルスで飛行機を乗り換え、ラスベガスに向かう。時差と飛行時間との関係で、午後成田を出て、同じ日の午後、ラスベガスに着く旅程である。ドルの交換レートは成田よりロスやラスベガスの方がよいとYさんは言っていたが、比べてみると成田の方がよく、高いドルを買う羽目となった。次回からは日本でドルを準備しよう。

今日の目的地はグランドキャニオンである。ラスベガスから Scenic Air のプロペラ機で1時間の飛行だ。小型機のため40人の同行者は4機に分乗する。グランドキャニオン観光飛行を兼ねているので、かなり低空を飛ぶ。そのため、天気は上々だが、少し揺れる。時差ぼけと酔い止め薬のせい、相棒は気分が優れぬようだ。ガイドフォンを付け、チャンネルを選ぶと日本語の案内が流れてくる。ラスベガスの街をあとにし、コロラド川をせき止めて出来たミード湖の上を飛ぶ。フーバーダムを越えると、雄大な峡谷が眼下に広がり始める。グランドキャニオンだ。



夕方、グランドキャニオン空港に到着する。ホテルにチェックインする前に、夕景を鑑賞するため、観光スポットのヤバパイポイントに向かう。峡谷の上に立つと、コロラド川は見えないが、10kmぐらい先に対岸が望まれる。夕日に映える峡谷は雄大で美しく、「絶景かな、絶景かな、」である。



長い一日が終わり、ロジスタイルのホテルに到着する。しかし、40名のチェックインや部屋割りに時間がかかり、部屋に落ち着いたときには既に暗くなっていた。今日の夕食はフリーである。相棒は疲れのため食欲がないという。私はビールが飲みたくて、一人でレストランへ向かう。レストランは好みの料理や飲み物を選ぶセルフサービス式である。チップの心配をしなくてよいから気楽である。トレイにビールと鳥の唐揚げを乗せ、キャッシャーで支払う。関西のツアー客で、仕組みがわからず大阪弁でぼやくおじさんの手助けをした後、疲れた体にビールを流し込み、明日からの鋭気を養った。

第2日目： グランドキャニオン？ ラスベガス（泊）

今日も天気は上々だ。グランドキャニオンの朝景鑑賞はパスし、昨夜レストランで買ったパンとバナナの朝食を済ませる。再び Scenic Air で昨日の飛行ルー

トをラスベガスに戻る。高度を上げているので揺れは少ない。岩肌をむき出した山や広大な砂漠を見ていると、昔見た映画「眼には眼を」を思い出した。

ある雨の夜、急病の妻を病院に運ぶが、深夜のため診察を断られる。妻は死に、復讐のために医師を砂漠に誘い込む。砂漠をさまよう2人の葛藤シーンが続く。やがて医師は飢えと乾きで倒れ、復讐を果たした主人公は砂漠をさまよい続けるというストーリーである。

間もなく砂漠の中にラスベガスの町が見えてきた。荒涼とした山々の間に、よくこんな巨大都市が誕生したものだと思わされる。着陸後、バスで今宵のホテルへ向かう。ホテルのレストランで昼食、40名の団体では時間がかかる。食事をした後、テーブルにチップを置く人、置かない人、様々である。部屋はまだ準備中のため、午後3時頃まで待たされることとなった。

疲れが残る相棒をホテルのロビーに残し、一人で近くを探索する。しかし、きらきらと照りつける太陽の下は、5分も歩けない。ギャンブルの都というだけあって、通りの両側にはカジノがずらりと並んでいる。

あるホテルのカジノを覗いてみる。スロットマシーン、カード、ルーレットなどのコーナーがある。野球やバスケットなど、試合の画面を見ながらオッズを楽しんでいる人たちがいる。フロアは広く、うろろしていると思子になりそうである。二階のステージではショーやサーカスをやっている。お父さんはギャンブルを、子供達はショーを、といったエンターテイメントが仕組まれている。

ホテルに戻ると、ビリヤードのキューを抱えた男女がたくさん行き来している。離れの広間を覗いてみると、ビリヤード大会が行われており、真剣にプレーをするハスラーたちがいた。まだ部屋の準備ができていないので、プールサイドで時間をつぶし、午後4時頃、やっと部屋に落ち着く。

今夜はディナーショーと夜景鑑賞のオプションツアーが予定されている。しかし、割高なので申し込んでいない。相棒は少し元気が出てきたので、ガイドブックを頼りにダウンタウンへ行くことにする。タクシーのドライバーにアーケードに映し出される映像ショーを見られるところへと伝え、フリーモントストリートに7時頃到着。

神戸の三宮センター街、大阪の心齋橋筋に似ているが、道幅は30mぐらいと広い。路上ではライブショーがあちこちで始まっている。辺りはまだ明るいので、暗くなるまで食事をする。年輩だが気さくなウエイトレスにビールとビー

フを注文する。チップを期待する彼らは愛想がよい。本場のビーフを味わうのはヒューストン以来、4年ぶりである。



外に出るとフリーモントストリート・エクスペリエンスと呼ばれる映像ショーが始まっている。アーケードに次々と映し出される映像は夢の世界だ。

フリーモントストリート・エクスペリエンス

ストラストフィアタワー

つぎに夜景をみるためストラストフィアタワーに向かって歩き始める。30分ぐらいでタワーに到着したが、展望台への入り口がわからない。商店が並ぶ通路を進み、行列が出来たエレベーターの前にきた。チケットを買い求め、30分ほど並んだ後、展望デッキに立つ。六甲山や東京タワーからの夜景も素晴らしいが、ここラスベガスの夜景は男性的で迫力がある。ホテルに戻ると12時を過ぎており、不夜城のごとく輝き続けるここでのギャンブルはあきらめ、ZZZZZZZの世界へ。



ストラストフィアタワーからの夜景

第3日目：ラスベガス？ ミネアポリス？ カルガリー？ ケンモア（泊）

今日はカナディアンロッキーへの移動日である。ラスベガス空港の搭乗ゲート前は長蛇の列である。入念なセキュリティチェックのためだ。20分ぐらい並び、ようやく私の番が来た。財布やベルトなど金物類を全て外し、四角いゲートをくぐる。係員に呼び止められた。金属探知器でボディチェックされる。同行者は何事もなく前へ進んでいる。「Thank you.」の一言で放免されたが、何となく要領の悪い男だなと思われ損をした一幕であった。

カナディアンロッキーの玄関口、カルガリーへはロスやシアトル経由だと早い
が、NW 乗り継ぎだとミネアポリス経由となる。ロッキー山脈を越え、映画「シ
ェーン」でおなじみのワイオミングの山々を眼下に、ミネアポリスまで3時間、
カルガリーまでさらに3時間のフライトである。大阪から新潟へ行くのに東京
経由で行くようなものである。おまけにミネアポリスではトランスファーのため
3時間くらい待たされた。格安ツアーの悲劇がここにある。

アメリカの空港には喫煙場所がないのも愛煙家にとっては悲劇である。ミネア
ポリスの空港をうろうろし、喫煙エリアを探すが、何処にもない。煙草を吸い
そうな黒人のガードマンがいたので、喫煙できる場所はないかと聞いた。「空
港を出るとバスターミナルがある、そこは OK」と教えてくれた。一度外へ出
ると、またあのいやなセキュリティチェックを受けなければ中へ入れない。し
かし、煙の誘惑には勝てず、バスターミナルへと急ぐ。

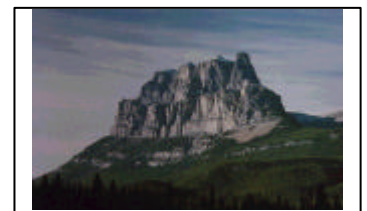
のんびりと煙を楽しんでいると、隣で中年のおばさんも吸い始めた。「アメリカ
はスモーカーには不便ですね」と話しかけると、「カナダは大丈夫、空港内にも
喫煙エリアがある。」と応える。彼女は今朝カルガリーから来たという。「我々
はこれからカナディアンロッキーに行くが、向こうの天気はどうか」と聞
くと、「今朝は雨が降っていた。雪だと山の景色は見えないが、雨は大丈夫だ」
とのことである。

カルガリーに着いたときには雨は止んでいたが、既に暗くなり
始めていた。今夜の宿、ケンモアまで110 km、バスに
乗り換え、フォーポイント・シェラトン ホテル(右写真)
に到着したのは深夜だった。61歳の誕生日を迎えた今日は
疲れただけの1日となった。



第4日目：カナディアンロッキー観光(ケンモア泊)

目が覚め窓のカーテンを開けると、山頂に雪をいただく山々が望まれた。素晴
らしい景観である。天気はまずまず、今日は今回のハイライト、カナディアン
ロッキー・バスツアーである。現地日本人ガイドとビデオカメラを抱えた兄ち
ゃんがバスに乗ってきた。ガイドの説明ではアサバスカ
氷河まで300 km走るといふ。ビデオ兄ちゃんは「今
日の主役は貴方です。編集したビデオはUS\$90でお分
けします。」と張り切っている。



キャッスル マウンテン

映画「帰らざる河」のロケ地となったポー河に沿ってバスは走る。車窓の両側には氷河で削られた険しい山並みが続く。間もなく城の形をしたキャッスルマウンテンが見えてきた。道路は整備されており、快適なドライブである。1時間ほどで最初の観光地モレーン湖に到着。湖までの小径を登っていくと、岩陰からナキウサギが姿を見せ、我々を迎えてくれた。山に囲まれたブルーの湖はまさに絵に描いたようである。



モレーン湖



レイクルイーズ



シャトー・レイクルイーズ

つぎにレイクルイーズを訪れる。森に囲まれた湖畔をしばし散策し、シャトーレイクルイーズをバックに記念撮影。このホテルは豪華ツアーの定宿であるが、我々は外から見るだけである。ドライブインで昼食後、再びバスに揺られアサバスカ氷河を目指す。途中、絶壁に姿を見せた白い山羊や道路際に現れた灰色熊が長旅を楽しませてくれた。バスは峠を上がり、小休止。今来た道を振り返ると大パノラマが展開し、映画「帰らざる河」のイントロで紹介された景観が広がっている。



大きな雪上車を運転する小さなカナダ女性



アサバスカ氷河は標高2000mに位置し、その奥はコロンビア大氷原へ続いている。バスを降りると遙か彼方に氷原が広がっているのが望まれる。タイヤの直径が背丈ほどある雪上車に乗り換え、20分ほどで氷河の真ん中に立つ。周りは白一色である。淡いブルーの氷河融水を賞味する。ウイスキーの水割りによさそうだ。ペットボトルに詰め込んでお土産にする人もいる。気温は0度Cぐらいであろう。しばらくすると雪が降り始めた。見通しが悪くなり、雪上車でバスターミナルへ戻る。

ペットボトルに詰め込んでお土産にする人もいる。気温は0度Cぐらいであろう。しばらくすると雪が降り始めた。見通しが悪くなり、雪上車でバスターミナルへ戻る。

帰路の途中でバンフに寄り、街を散策する。キャッスル マウンテンが見え、間もなく出発地ケンモアに到着した。今日はカナディアンロッキーを満喫した1日であった。

第5日目：ケンモア？ カルガリー？ ミネアポリス？ トロント？ ナイアガラ（泊）

今日も移動日だ。カナディアンロッキーをあとにして、カルガリーからミネアポリスまで飛ぶ。ミネアポリス空港のバスターミナルで一服したあと、乗り換えてトロントへ。トロント空港からバスでナイアガラに向かう予定だが、迎いのバスが見あたらない。添乗員のYさんはどこかに連絡を取っている。彼女の荷物をワッチし待っていると、30分ぐらいして迎いのバスが来た。荷物の積み込みを手伝い、滝のそばのホテル（シェルトン オザ フォールズ）に到着する。

既に夕刻となっていたが、部屋から滝が見え、壮大なスケールの滝に満足する。夕食はフリーなので、ライトアップされた滝を見ながら食事出来るミノルタタワーへ行った。カナディアンビール、ワイン、ビーフはグーだった。



シェルトン オザ フォールズ

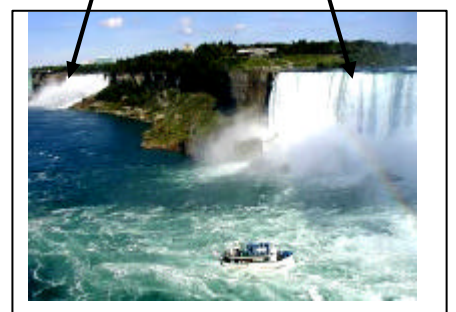


部屋から

第6日目：ナイアガラ？ トロント（泊）

「霧の乙女号」に乗船して、アメリカ滝、カナダ滝を間近に見学する。雨合羽を着ているが、風と水しぶきが凄まじく、写真を撮る状況にない。「霧の乙女号」というよりも、「土砂降りのジャジャ馬号」という感じである。下船して滝の裏側に行ってみたが、ここも水しぶきでゆっくり見学できない。滝に近づく冒険も楽しいが、展望台から滝全体をゆっくり見るのがお勧めである。

アメリカ滝 カナダ滝



滝の眺めが素晴らしいスカイロンタワーで昼食をとり、オンタリオ湖に沿ってナイアガラからトロントへ向かう。途中ワイン工房に寄り、試飲したあとトロント市内を車窓から見学。

オンタリオ湖畔の船上シーフードレストランでの夕食となった。ツアー案内ではロブスター料理となっており、楽しみにしていた。しかし、レストランのカナディアンウエイターの対応は、「日本の団体さんよ、さあ早く食べて、早く帰ってくれ」といわんばかりである。ビールのお代わりを注文して、ささやかな抵抗を試みたが、ゆっくりロブスターを賞味できなかった。今まで好感をもっていたカナダ人に対するイメージがダウンしたのは残念である。



トロントのホテルは空港近くにあったため、ダウントウンを散策する機会はなかった。ホテルのバーでビールを飲んだあと、明日の帰国に備え、ただ寝るだけとなった。

第7日目：トロント？ デトロイト？ 成田着

アメリカンの朝食を腹一杯詰め込み、あとは帰るだけである。トロントからデトロイトへ行き、成田行きへ乗り換える。これだけ飛行機を乗り継いだ旅は初めてだ。飛行機の事故は離発着の時が多い。もうこれで成田の着陸だけかと思ったら、機内アナウンスが流れる。「急病人が出たので、アンカレッジに臨時着陸する」という。

30年ほど前、ノルウエーへ行く途中、アンカレッジに寄ったことがある。当時、北回りのヨーロッパ行はここで燃料補給をしなければならなかった。トランシットの間、空港の売店で日本語を話すエスキモーをからかった（からかわれた？）のを思い出す。今は飛行機の航続距離が伸び、アンカレッジに寄港するフライトは少ない。

病人を降ろすだけで、我々乗客はアンカレッジでの降機は許されず、2時間遅れて夜8時、成田空港に無事着陸した。

今回の旅行は実にハードなスケジュールであった。飛行機に10回、延べ46時間乗った。40人の団体客が事故もなく、無事日本に帰って来たのは驚きである。熟年パワーを感じつつも、次回はもう少し余裕のあるツアーに参加したいと思う。